

サン＝シモンと信仰

富 岡 勉

1. 緒 言
2. サン＝シモンの思考の推移
3. サン＝シモンの社会正義
4. 「新キリスト教」
5. サン＝シモンの信仰の性格
6. 結 語

1. 緒 言

サン＝シモンは空想的社会主義者の代表的人物として、オーエン、フーリエと共にしばしば採り上げられる。また、道徳主義者として取扱われることも多い。あるいはまた、コントとの係わりあいから、社会科学の領域において人間竝に社会の実証経験に基づく組織的究明態度から、「社会学の父」として認められることもある。社会主義者である反面、彼の弟子達の行動理論により、サン＝シモンニヤンを含めて、社会主義者側から反動的資本主義的性格を指適されている場合もある。左右両派からそれぞれ自家陣営において重要視される程、彼の理論と性格は多様で巾広く、また、先見的予言者的であるとともに、一見、つかみ所のない複雑なものと思われた。

しかし観察を深めてみることによって複雑怪奇に思われる彼の理論は、極めて明確に一本筋が通っていることが判る。それは、地上権力の支配する世俗世界にあって、永遠の命を得るためにどのようにキリスト教の精神を生かすべきか、ことに実践上どう生かすべきかということであった。いわば、初期キリスト教精神を、フランス革命後の混乱期と王政復古の時代に、どのように実践するかということであった。したがって、そこには当然サン＝シモンの信仰の在り方が問われることになる。社会科学を前面に押し出せば、キリスト教をある権威―権力でなく尊敬と信頼―のために利用したと、デュルケムの如く解することも出来よう。

けれどもこの小論では、サン＝シモンが社会正義として彼の信仰から実践に移ろうとして、どのように思索を重ね、「新キリスト教」(Nouveau Christianisme)に至ったかを尋ねて、その信仰がカトリック教とどのような係わりであったか、そして、プロテスタンティズムの福音信仰と性格上どうなっていたかを問うてみたいと思う。主として資料は、Oeuvres de Saint-Simon & D'enfantin : Aalen Otto Zeller, 1963 により、補足の形で Henri Saint-Simon 1760 - 1825, Selected Writings on Science, Industry and Social Organisation : Translated with an Introduction and Notes by Keith Taylor を用いたが、語学力不足、サン＝シモン理論への理解不足、福音信仰の弱さ、とによって多分に不十分な所と、ドグマテイカルな点とがあることと思われるが、御教示御指導をいただければ幸いである。

2. サン＝シモンの思考の推移

サン＝シモンはとりとめもなくあれこれと羽根を広げて研究の対象を求め、支離滅裂の歩みが続けたかのように見える。けれども、彼がロードリゲ宛へ送った手紙を見れば、それは人間と社会の実証科学的追求を行うことに集中していたと思われる。すなわち、

他のすべての人と同様、わたしは神の哲学を体系化しようとした。宇宙現象から太陽系現象へ、そこから地上現象へうまく説き及び、地上現象の附ずい物と考えられる種を研究すること、そしてこの研究から、社会組織の法則、わたしの探求の基本で本質的な目的を引き出すことをしようとした。^{註1}

と述べていることにつきると考えられる。

このことはすでに早くから、彼の脳裡に育ち始めていたように見受けられる。彼がフランス軍人としてアメリカ独立戦争に参加した1780年代に、アメリカの息吹きを感じて、彼の知的発展が次第に人間精神の進歩の研究にむけられたようである。1817年の「産業」誌第二巻(L'Industrie)に出版された「アメリカ人への手紙」(Lettres a un Americain)の中で次のように述べている。

平和が近づいていると判った時、わたしは全く、職業軍人に対するあいそつかしで参ってしまった。わたしの趣味と性癖がわたしに要求している経歴なのだが、どんな経歴を採用すべきか明らかにわたしは感じた。軍人であることはわたしの職業でなかった。わたしは全く異った方向に決心し、全く異う種類の行動を言ったかもしれない。

次に、文化の改善のために働くべく、人間精神の進歩を研究することである。それがわたしに課せられた目的だった。その時から全くそれに我が身をゆだねた。わたしはそれに全生涯を捧げ、この新しい課題がわたしの全精力を引きつけはじめた。^{註2}

人間の研究から入る必要は、社会組織の法則の探求のためである。社会を組織建てているのは人間だからである。人間精神の歴史的発展過程をたどり、自然科学での法則との関連性において歴史法則を探り当て、社会組織の法則に到達することであったと思われる。このために彼は、数学、物理学の重視から始めた。ニュートン教がそれである。

ニュートン教は1802～3年の「ゼネバの住人から同時代の人々への手紙」(Lettres d'un habitant de Genève á ses contemporains, 1802～3)において示されたもので、この中で彼の画いた幻のために、空想的社会主義者と称されるに至ったのではないかと思われるが、人間精神の発展過程においてカトリック教が、初期キリスト教の精神を忘れ、全く教皇と僧侶のためのキリスト教に墮落し、地上権力との妥協によって、カトリック教自身も組織・制度において地上権力化しつつあることを看取した彼は、霊的権力の地上権力に対する優位を保つため、

カトリック教にとって代るものを求めたのであった。

カトリックの教皇をはじめ、僧侶達、ならびに彼らとの深いつながりのある貴族達は、身分制の門閥によって社会的支配層を形成していた。このことは、神の子はすべて平等であるということからはほど遠いことになる。サン・シモンは門閥に代り神から与えられた才能を、支配に代り管理を条件とした。才能ある者が支配の位置につくのではなく管理の責任者となることである。彼はゼネバの住人からの手紙の第二信の中で次のように述べている。

わたしに語りかけたのは神であった。人間は、これまで世にあったすべてのものに優る宗教に、招かれることが出来たろうか？ それらの中のどれも、初まりが神聖でないことをまづ第一に考えられねばならない。わたしに啓示された宗教を見よ。その根本原理がどんなに明瞭かを見るがよい。そして成しとげられるにどんなに確実であるかを見るがよい。人類の利益のためにそれぞれ個人的な力を断えず行使するよう、良心の命令がすべての人に圧力を加える。貧乏人の腕前は金持を養うために続けられるであろうが、金持は自分の頭脳を働かせるように管理され、彼の頭脳が仕事を止めると、彼は手で働かねばならないだろう。なぜならニュートンは、確かにこの天体（太陽に一番近いものの一つである）に役立たずにいることを、どの働き人にも許さないからである。

われわれは、僧侶が人間の指導者を選ぶ権利を持っている宗教を、も早や、持っていない。あらゆる信者は、毎年、自分達の指導者を任命する。そして、神の選びの代表者と認める資格は、も早や、貞節や節制のような無意味な徳ではない。その資格は実際の才能である。「一番大きい」才能である。

わたしはこの主題を長びかせない。天啓を信ずるものはみな、次のことを当然納得するであろう。すなわち、神のみが成員一人一人に兄弟愛の法則に従わせる手段を、人類に備え給うことが出来たということである。^{0.113}

そしてこのような社会組織のもとでは、靈的権力が科学者の手に委ねられれば、政治機関を支配する地上権力は、二次的重要さの地位に置かれるようになると、彼は期待した。それは、将来の予測は地上権力者には為し得ない所であって、科学者の為し得る所とみなしたからであろう。万有引力の法則を適用し、数量的計画に基づいて、宇宙の発展の予測を科学者は出来ると見たからに他ならない。そして、この方法は社会科学の面においても同じであるとしたからである。

この想像は、あなた方の知性に、同じ観点からあらゆる現象を考えることが出来るようにさせるであろう。なぜかといえば、宇宙についてのあなた方の計画について、あなた方が占めている部分を試してみれば、あなた方が精神的と称する現象と、物質的と称する現象との間に、どんな相違もないことが判るであろう。^{0.114}

と述べている。

けれども彼は、今日のコンピューターの如く、単に数的、物理的把握だけで成功するとは考えていなかったのではあるまいか。というのは、同じくゼネバの住人からの手紙の第二信の終りに、

……万有引力の概念の明確な理解と、仕事を完成するため生理学（人間精神の進歩についての観察を含む）の知識とは、誰にとっても容易なものとなるであろう。^{註5}

と記していることから、次のステップとして生理学を考えたことが看取される。サン＝シモンはつねに、経験的な観察に基く科学のレベルまで、人間と社会の研究も高めることが出来ると確信していた。同じ実証科学的方法が社会科学の分野においても採用可能と信じた。そして、人間科学を生理学の一部門、組織現象の科学と確信していた。他の有機体と同じく自然法則によって人間科学も、その進歩が左右される有機的存在であり、また有機体であることから組織という考えに進む。よく組織化された社会こそ健全な社会と考えられた。生理諸変化は突然発生するのではなく、その時以前に既に基因が内在し、これを知ることによって将来を予測することが出来るのと同じく、歴史上の社会変化も、将来発生する出来事の原因は既に現在の現象の中に内在しているに違いないので、これらを科学的に観察し分析出来る筈であり、歴史の将来の過程を予測することが出来ると信じた。

サン＝シモンは古代以来の人間社会の発展の一般過程を追跡することによって、現在の歴史的状況の分析の出発点にしようとした。そして社会進化の観察は、人間知性、知識、信仰の発展のために必要と考えた。彼は歴史の背後にあるイデオロギー的、教理的権力の存在をつきとめることが大切とみた。そして歴史上に現われた社会組織形態は、その時代を支配する権力の道徳律の反映であるとみて、新しい道徳価値の採用の必要性を重視した。

新しい道徳価値の採用と記したけれども、これは実は新しいものではない。J. J. ルソーが「自然に帰れ」と唱え、マルクス、エンゲルスが共産制に帰ることを主張したのと軌を同じくするもので、初期キリスト教精神に帰ることに他ならなかった。兄弟として互に愛し合う、ということの実践であった。それは人間が幸福になることであり、地上権力の下で、精神的、物質的生活欲求が充足せられることであった。これがために生産性が高められ、生産高揚に科学性が採用されることであった。こゝで当然産業が重要さを増し、産業者が重要視され、彼らの才能が高く評価されることになる。も早や、門閥では兄弟として互に愛し合うことの実践は不可能であった。とくに、1789年のフランス革命後の社会組織の再建においては、科学的推理に根ざした新しい道徳律が形成され、これが受容されなければ、人間社会の再組織の達成は不可能と信じたのである。

註1. 'Notice historique sur Saint-Simon', Oeuvres, vol. 1. p.49

註2. 'L' Industrie, Seconde Partie' Lettres á un Américain, Deuxième Lettre : Oeuvres vol. XVII^e p.148

註3. 'Lettres d'un Habitant de Genève á ses contemporains, Seconde Lettre' Oeuvres vol. XV^e p.57

註4. Genève, Oeuvres vol. XV^e p.59

註5. Genève, Oeuvres vol. XV^e p.60

3. サン＝シモンの社会正義

新しい道徳律は新しい社会組織の反映である。新しい社会組織は才能ある産業者が、科学を採り入れた産業を中心に指導し管理する社会である。こゝではもはや、政治機関は二次的の重要性しかなく、成員が彼らの精神的、物質的生活が改善されて満足している社会である。したがって、こゝでの道徳は神学上の道徳ではなく、聖書の道徳である。いわば、永遠の命 (la vie éternelle) を得る道徳である。兄弟として互に愛し合う道徳である。

科学的産業時代での地上機構の再組織は、靈的権力の再組織によって達成出来るとサン＝シモンは考えた。このことは、カトリック僧侶によって形式的に占められていた道徳的教育的指導権が、実証科学者や芸術家によって奪われることを意味した。社会の新しい指導者、管理者は、道徳がキリスト教初期の教えと全く一致する真のキリスト者であるべきだという考えであった。すなわち、指導と公共目的という新しい宗教的意識を持ち、道徳的指導力を持つ才能ある産業人こそが、新社会に要望される人物であった。「神の道徳と人間の道徳とは、等しく産業者を社会において第一の役割を演じるよう運命づけている。」¹¹⁶「最も重要な産業者は管理に最大の能力を現わした人々である。それというのも彼らが得た重要性は、このような管理における彼らの能力に負っているからである。結局、社会的利益の管理が必ず託されるのは彼らに対してである。」¹¹⁷このような人物が、社会正義を達成することが出来ると期待される人々であった。そこでサン＝シモンは、「われわれは次のような結論を引き出す。すなわち、神の道徳と人間の道徳は、あらゆる種類の能力においても傑出した人々に、産業体制の組織化をその細部にわたって行うため、また一般社会に産業体制を実施させるために、彼らの努力を結合することを要請する。」¹¹⁸と主張する。

それではこゝに言う社会正義とは何か？ それは兄弟として互に愛し合うことの実践であり、最大多数階級の最大幸福を計ることである。カトリック僧侶と門閥貴族がフランスにおいて支配し、自分達の道徳律、自分達の組織による拘束を最大多数階級の人々に強制していたことは、最大多数階級の人々が不幸に陥し入れられていたことであり、彼ら最大多数階級の人々の欲求が正しく充足されていなかったことである。そこで、人間存在の本来性に即した在り方を願うことが社会正義であるとすれば、最大多数階級の人々が満足感を与えられ、矛盾を感じない生活を送れるようにすることが正義といえるであろう。だからサン＝シモンは、神の愛に応える場として社会を考えたのではなかろうか。

社会正義と記したけれども、サン＝シモンはもともと人間の存在の権利としての正義を考え

たというよりも、神と人間の間に関係の在り方から出発したのではなかったろうか。人間が神の意志に従順であり、神の意志にまともに応える姿勢を正義と考え、これを地上権力の中で実践することを社会正義と受け止めたのではなかったろうか。

彼はキリスト教は神聖な起原^{註9}をもち、神が人間にその行為の規範として与えられた原理^{註10}があって、この原理に従って最大多数階級の人々が最大幸福であり得る社会を組織し、人間はすべての労働、すべての行動において、最大多数階級の日々の精神的、物質的生活の改善を最も速やかに、また、完全に行うことを目的とすべきであると考えた。^{註11} さきにこの正義は神学上の道徳でなく、聖書の道徳であると記したが、これは、「神自らお告げになった言葉と、僧侶達が神の名において言った言葉とを識別しなければならない」^{註12}と明瞭に述べていることから判るであろう。さらに、彼は続けて次のようにいう。

キリスト教は信者に対して地上における目的として、貧しい者の精神的、物質的生活の出来るだけ速やかな改善ということを提案する。イエス・キリストは最も熱心に最大多数階級の幸福の増進に力をつくす人々に対し永遠の命を約束された。^{註13}

と。ところが、カトリック教の僧侶は神との関係を自分達の解釈を中心に曲げてしまったことを非難する。その第一は、僧侶が信者に与える教育についてである。神との正しい関係を信者に教育する代りに、僧侶との正しい関係にすり代えていることであって、僧侶に対する絶対服従を目的としていることである。^{註14} 僧侶によってのみ導かれねばならないと信じさせていることである。^{註15} 僧侶の説教、祈祷、対話、教儀、礼拝等、何れにおいても、最大多数階級の人々の幸福の増進へ尽力することを目的としていることなどは発見出来ないとしている。^{註16}

非難の第二はカトリック神学に対してである。カトリック神学は神学校で教授する唯一の科学、教皇や枢機卿等が研鑽を積まねばならないと信じている唯一の科学、カトリック教会の首脳者達が、司祭、司教、大祭司達のように信者の行為を指導する立場にある者に対して要求する唯一の科学である。これは彼らにとって重要であるかもしれないが、信者に対しては本質的な目的にむかって注意を注がせるものでなく、些細な事物、形式的な事物に注意を注がせる手段を提供するものであって、信者達に永遠の命を得させる神の地上での大目的を見失わせる手段を、提供するものにすぎないというのである。^{註17}

非難の第三はカトリック教会管理下にある土地行政の失敗である。カトリック教会管理下の土地の住民の貧困と、農地離れの事実である。それは人間の社会的存在の根本的關係に対する教皇の認識不足と、枢機卿達の保守反動的姿勢と、管理下領域での独占権の存在である。これによって信者達が如何に恵まれなかったかということである。このため産業も惰性で動き進歩は見られず、科学的産業を罪悪視するため産業の発展が見られず、雇用不足が生じ貧困者の増加が見受けられた。非キリスト教的支配によって物質的な事柄を支配した点である。^{註18}

宗教裁判の美名のもとに暴力の処刑をもって人命を損なった。これは非キリスト教以外の何

物でもない。カトリックの教義、礼拝に違反した事柄を犯罪として重刑を加えた。カトリック僧侶の全能を維持することを目的としたもので、最大多数の貧しい階級の人々を犠牲にしたものである。福音書の道徳に全く反する道徳を守らせ、且つ又、守ろうとしているとサン＝シモンは非難する。^{註19} このことからすれば、サン＝シモンの社会正義は、福音書の道徳に忠実なことであり、それは神の大目的に服従した行動をとることになるのであろう。

註 6. 'Catéchisme des Industriels, 1 cahier', Oeuvres vol. XXXVII° p.43

註 7. Catéchisme, Oeuvres vol. XXXVII° p.44

註 8. Catéchisme, Oeuvres vol. XXXVII° p.61

註 9. 'Nouveau Christianisme', Oeuvres vol. XXIII° p.107

註 10. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.108

註 11. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.108

註 12. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.108

註 13. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.120, 121

註 14. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.124

註 15. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.124

註 16. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.122

註 17. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.125, 126

註 18. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.127, 128

註 19. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII° p.130, 131

4. 「新キリスト教」

サン＝シモンの社会正義の考えはくり返しくり返し諸々に現われている。「ゼネバの住人から同時代の人々への手紙」をはじめ、「人間科学についての研究」(Mémoire sur la science de l'homme)「産業体制論」(Du système industriel)「産業」(L'Industrie)「ヨーロッパ社会の再組織について」(De la réorganisation de la société européenne)「組織者」(L'Organisateur)「産業者の教理問答」(Catéchisme des industriels)「博愛主義者に対する書簡」(Adresse aux philanthropes)などの中に反復して記されている。時には彼の思想が混乱しているのではないかと思われ、あるいは、全く思想が系統建てられていないのではないかと思われるようなしつこさで主張されている。「博愛主義者に対する書簡」の4年後、既に60才を超えていたサン＝シモンは、カトリックやプロテスタントに基づかず、キリスト教初期の教えに基づいた正義の社会実現のため、教会と国家との関係を調整して宗教の優位性を訴えた集大成として、1825年春、「新キリスト教」を出版した。その後6週間の苦しみの床に伏した後、5月19日午後10時死亡した。

「新キリスト教」はこれまで記されてきたことを対話形式で取扱っている。保守主義者 (le Conservateur) と革新主義者 (le Novateur) との対話になっているが、この形式は「新キリスト教」より一足先に世に出た「産業者の教理問答」で採用されている。

さきに、「新キリスト教」はサン＝シモンの思想の集大成をなしていると記したが、この中で

彼は見事に弁証法的発想を現わしている。このことはマヌエルも「サン＝シモンの新世界」^{註20}において指摘しているけれども、それは社会科学的見地からのものである。本論においてはそれを信仰の見地から取扱ってみたいと思う。

彼は個と集団との止揚を、「新キリスト教」において開花させていると思われる。初期キリスト教信仰は個人性の強いものである。元来、信仰は個人の内的問題が中心であろう。外見に現われた形の上においては、教会に集ったり集団で礼拝を行ったりして集団化されていても、その内容は一人一人の信仰の度合、各個人の問題意識の相違、内的問題の有無と大小等によって、その受止め方が各人各様であり、したがって問題解決もマチマチで、これを集団的に解決することは難しい筈である。聖書に現わされている救いは、イエスの癒し、奇跡を含め、個人的である筈である。

15世紀までのキリスト教に対するサン＝シモンの評価は高い。15世紀以後と以前の僧侶を比較し、彼は、「今日、その意見や道徳論や礼拝や教養を、人間が神から受けた道徳原理の上につけ加えようとしている僧侶はすべて異端者である。というのは、彼らの意見や道徳論や教養や礼拝は、多かれ少なかれ、神のなし給う道徳に反するものだからである。したがって、最も有力な僧侶ほど異端も甚しい」^{註21}と述べ、また、「わたしは、教会の神父達を、彼らが真実を行った当時は過誤がなかったと思う。これに反し、今日の神父達は、社会制度の中にあって最も大きい過誤、社会に最も有害な過誤を冒していると思われる。その行為は神聖な道徳の根本原理と全く反対の点にある」^{註22}という。このように15世紀以降の僧侶の在り方を批判し、それは初期キリスト教は地上権力と霊的権力が分けられていたからであり、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返す」^{註23}ことであった。したがって、初期キリスト教の僧侶は、ひたすら神の教示に忠実で、個人の救いのために働いた。地上権力に遠慮することなく、神の救いの実現に努力したのである。

しかし、15世紀以降のカトリック教は教皇をはじめ、僧侶達が地上権力と妥協し、自らも世俗化することによって墮落がはじまった。信者に対する封建的権威の誇示。レオ十世の地上権力者的振舞と奢侈並に免罪符売上金の私有化。枢機卿会議の無能。世襲的門閥の重視と個人能力の軽視。僧侶政治向きのキリスト教義解釈。つまり、神の言葉を僧侶が神の名においていう言葉に代えたこと^{註24}などと、その数を枚挙するに暇がないほどである。

こゝにおいてサン＝シモンは、神の意志の本来性の尊重と実現を目指した。しかも彼は飽くまで聖書に基いていた。聖書における行動の組織化と実践の中心は「ローマ人への手紙」といわれている。パウロの指導がキリスト教を組織的にし、実践を強固なものとした。したがってサン＝シモンが「新キリスト教」の第1ページに、ローマ人への手紙第13章8, 9節の「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」^{註25}という聖句を掲げたのも、真に理由のあることと言えるであろう。こゝから彼は、最大多数階級の最大幸福をベンタムの理論とからませて志向し、精神的、物質的生活改善のための生産性向上による科学的産業主義を主張するに至った。

しかし、ことが科学性を要求することになれば客観的要素が強くなる。個人性は捨てられね

ばならない。サン＝シモンが科学を重視し、門閥貴族階級の支配を排除しようとして、生産の才能、管理能力を評価し、科学的産業主義による生産性高揚によって、最大多数階級の人々の精神的、物質的生活改善を要求したことは、社会制度の中の個人を超えた問題の領域に入り込んでいるわけである。彼は社会的矛盾の解決を志向したのである。社会における最大多数階級の人々の不幸を正そうとした。社会における人間存在の本来性を取り戻そうとした。つまり、生きて行くべき権利を神から与えられた主体の本質を取り戻そうとした。しかし、それは過激な革命によってではなかった。フランス革命中反動とみなされて危うくギロチン台に送られる所であったサン＝シモンは、暴力革命による無政府的混乱と恐怖と、破壊のみ存在して再組織の行われぬ不幸を充分味っていたので、平和裡に社会組織の再建を願った。それがために、科学的産業主義に基づいた管理社会を意図したのである。門閥貴族を中心とする支配社会から、有能産業人による管理社会の幻を追ったのである。

このように科学的産業主義に基く社会組織は、最大多数階級の人々の精神的、物質的生活改善を目指すのであるから、対象は集団となり没個人的である。サン＝シモンは初期キリスト教の個人性と科学的産業主義の没個人性を止揚して、科学的な世界の中に個人性を優位に生かした社会を思考したのである。これが「新キリスト教」であった。彼は社会における生存権を、単に権利として主張するのではなく、個人の自覚に求めたのである。いわゆる信仰であって、「新キリスト教」がその中心となる。神の意志に対応する忠誠と実行とである。こゝにおいて彼は弁証法的に思考を展開させたのである。

サン＝シモンはクロード・アンリ・ド・サン＝シモンと呼称されるフランスの貴族出身で、ベルモンド伯爵の出身のシャルマーニュ家の子孫と自称した。彼の親族にはサン＝シモン公爵ルイスや、サン＝シモン侯爵マキシミアン・アンリなどがいた。したがって考えられることは、当時の貴族の宗教としてはカトリック教であったことから、サン＝シモンもカトリック教徒の家庭に育ち、カトリック教の種々の礼拝に臨み、教義を教育されていたと推量出来るであろう。しかし彼は J. J. ルソーやディドロ、ダランベール等の百科全書派啓蒙学者達の影響を受けた。それは貴族としてパリー社交界に幼年期から出入りしたことによって、多くの親交を得た結果と思える。百科全書派の啓蒙を受けたので、宗教に関しては批判の目と独立心への影響が大きかったといえよう。生れながらの性癖のためか 13 才にして聖餐式を受けることを拒否し、怒った父親のために刑務所へ送られたこともあった。これ以来父親との関係は冷却化して行った。

これから推察出来るように、彼はカトリック教に対して反逆的であった。彼はカトリック教に対しては、ゴリアテに対するダビデのようであった。²⁶ その批判は痛烈を極めた。

反カトリック教的態度は親プロテスタントを必ずしも意味しない。ルターのカトリック教への反逆行動を高く評価しながらも、全面的に賛成はしなかった。カトリック教、ローマ法王庁を破壊するにはルターは預って力があったが、単なるプロテストであって、新しいキリスト教の再組織は全く出来ていなかったと批判した。²⁷ 「能く批評した。そして教理をたてそこなっ

た」^{註28} ということである。サン＝シモンはフランス革命後の混乱と恐怖を身をもって体験したので、破壊だけでなく、破壊後の再建再組織に関心を寄せていた。社会の再組織を常に念頭においた。キリスト教についても、プロテスタンティズムはルターによる宗教改革によってカトリック教を破壊したけれども、再組織化には無力であった。再組織こそ重要であり、ルターの為し得なかったことをサン＝シモンが果さなければ、神の意志の実現は地上において不可能と考えたのである。彼が常に再建の組織化を志向していたことは、パウロを高く評価していることでも判る。彼は、キリストは宣教したが組織化をしなかった人で、

キリストは良き人であった。彼は精力的で熱心だった。彼は公正な善い要因のために励ましを受けた。しかしキリストは汚れのない人だった。彼はキリスト教を基礎づけ、それを理神論の上に基づかせた。彼は弟子に対し、聖霊の導きを伝えたが、教義の実体を残さなかった。^{註29}

ので、この宣教を組織化したのがパウロであるとしている。^{註30} 神の意志の地上においての実現のためにルターの為し得なかったことを、自分が行おうと臨んで「新キリスト教」を唱えていた。

註 20. 'The New World of Henri Saint-Simon' by Frank E. Manuel. Harvard University Press 1956

註 21. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.111, 112

註 22. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.111

註 23. マタイによる福音書第 22 章 21、マルコによる福音書第 12 章 19

註 24. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.108

註 25. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.99

註 26. サムエル記上第 17 章

註 27. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.157, 158

註 28. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.175

註 29. Taylor ibid. 'On Religion' p.99 (Introduction aux travaux scientifiques du XIX^e siècle, 2 vols.)

註 30. Taylor ibid. On Religion p.99

5. サン＝シモンの信仰の性格

彼の信仰は理神論 (le deisme) であるといわれている。彼自身も啓蒙主義の影響から理神論者を自認していたと思われる。しかしニュートン教のみでは不十分とみたのか、「宗教について」の中の「わたしの意見」として、

わたしは、社会秩序を維持するために宗教の必要であることを信じる。理神論は後退したが、物理主義が新宗教の基礎として役立つようには、充分発展せしめられないと信ずる。^{註31}

と述べ、さらに、

わたしは二つの明確な教理があるべきだと信じる。すなわち、人間を教育するための物理主義と、高潔にするための理神論とである。^{註32}

と明瞭に理神論を唱える。

キリスト教は一神教である。「わたしのほかに、なにものをも神としてはならない」^{註33}という戒めを忠実に守る宗教である。したがって、キリスト教は世界に一つの中心を与えるものである。

社会は一つに結合された一つの宗教理論と、一つの道徳理論を持った。なぜならば、神の愛と隣り人の愛とは、信者達の極めてけげな感情に一元的性質を与えたのである。^{註34}

と言い切っている。そして、「キリスト教は一なる神への信仰と普遍的友愛の教義で全人類を統合することによって、大きい前進をもたらした。この手段でさらに広い社会を組織し、すべての国々の国民を、一つの共通の家族に統合することが出来るようになった」とサン＝シモンが「産業論」の中で述べているとデュルケムは指摘する。^{註35}したがって国境はなくなりインターナショナルとなり、普遍的な世界国家となろう。

サン＝シモンの考える科学的産業主義社会は、科学性においてはニュートンの万有引力を神の法則として唯一のより所とし、他方産業の領域にあっては全ヨーロッパの産業人が同じ利益のもとに結合し、共同管理による産業的共同の地上での結びつきの上に、精神的共同としてキリスト教道徳を中心とする統一を要望した。彼は地上的なものに霊的なものを単に対抗させるために、「新キリスト教」を唱えたとは思えない。神秘の彼方に人間を閉じ込めるために、また、地上的現実から人間の眼をそらせるために、宗教と信仰を持込だとは思えない。科学的産業主義社会の冷徹硬直化傾向の予防として、人間社会の各人を結びつける精神的絆として、「新キリスト教」を提唱したのではなかったろうか。これによって、単なる個人の集合体の人間でなく、社会化された個人としての人間が、一つの神のもとに一体となって前進出来ると考えたのではなかったか。万有引力理論は客観性ある普遍的なものであるが冷徹である。この第三者的なものへ、他人のために自らのエゴイズムを捨て去って積極的に社会に一人称として働きかける温い行動は、互に兄弟と感じさせ積極的に他人のために行動出来る動機を感ぜさせねばならない。それは精神的なものである。一体となって力を結集出来るのは、唯一の神のもとに、その神に忠実な行動をとる以外にはないとサン＝シモンは考え、そこにまた個人の尊厳性を認めようとしたのではなかったろうか。

では、サン＝シモンは神をどのように見たか。「新キリスト教」の対話の冒頭に

保守主義者「あなたは神を信じますか。」

革新主義者「ハイ、わたしは神を信じます。」註36

と述べていることから見て、彼が神を信じていたことは確かであろう。

彼の信仰が理神論的であることは先に記したところであるが、彼の理神論の根拠が百科全書派の影響を大いに受けていたといわれている。理神論はフランスにおいては、フランス革命前夜には反動勢力打倒の武器として用いられた。カトリック信仰打倒の旗印でもあった。神信仰は変らなくても、その信仰は神秘のベールに包まれてはならなかった。理性によって認められる範囲内のものでなければならなかった。サン＝シモンがニュートンの万有引力の法則を重視し、科学的産業主義を唱えていることは客観性を求めていることになる。したがって、神信仰も理性によって納得出来る神であることが要求される。地上では理性と人間の科学に委ねられ、靈的権力が地上権力に対し優位性を維持して止揚されるからには、その靈的権力の根源である神信仰は、理神論的にならざるを得ないであろう。神秘的、閉鎖的信仰でなく、客観化された実証としてのキリスト教道德となって要求される。新しいキリスト教的社会組織は、「人間は互に兄弟として振舞わなければならない」という大テーゼから引き出されることになる。実証経験的で世俗的なすべての帰結は、こゝに内包されている。

サン＝シモンの信仰が理神論的であることを見て来たが、理神論であるからには、神によって宇宙が創造されて以来、宇宙の法則によってこの世は働き、自己展開する力を持つことになる。サン＝シモンは「宗教について」の「わたしの意見」の中で先に記したように、「人間を教育するための物理主義と高潔にするための理神論」があると述べ、「科学者は理神論者である」註37といひ、「最後に、来るべき将来のためにわたしの敬意を申し述べる」と締めくくっている。

理神論は、信仰を理性によって認められ得る範囲内に限定しようとするから、聖書の啓示や恩ちよう、摂理を神の業とは考えない。福音についても同様であろう。したがって、福音書についても理神論の立場からみれば、納得しかねることが非常に多いことであろう。サン＝シモンは福音書に表わされている「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりせよ」註38ということだけでは満足出来ず、「この原理は消極的であるから、間接的に拘束するにすぎないということ」註39になり、「自分に対する個人に、何ら義務を課さないということである」註40したがって理神論として納得のいくように、積極的拘束を求めて次の如く言い換える。「人は働かねばならない」註41と。すなわち、人々の役に立つように働くことなのである。それがまた最も幸福なのだという。「最も幸福な人は労働者である」註42「金利生活者、職業がなく自分の財産を増殖させるに必要な仕事を、自分で直接行わない者は、社会の重荷である。たとへその人が施し物を与えるとしても」註43人類に役立つよう働いている人々の中でも、「科学にたづさわっている人は最も道徳的で、また、最も幸福な人達である。というのは、その人達の働きは、人類全体に役立つからである」註44これからみれば、福音は神から与えられるものでなく、

自らの働きによって創造して行くものということになる。

サン・シモンが帯剣貴族の家庭に生れ、カトリック教信仰の雰囲気の中に育ちながら、カトリック教への反逆から理神論に走ったことは、既に見て来た。しかし、彼が「新キリスト教」で批判の対象としてカトリック教と共に採り上げたのは、ルターのプロテスタントであった。そしてこの中でルターの行き方について評価と批判を与えた。このことはルターの福音信仰について深い研究がなされたことを意味しよう。そして批判に留まらず高い評価を与えていることに注目すべきではなかろうか。ルターの福音信仰について理解をもち、その影響を受けていると考えられるからである。「新キリスト教」においては、「宗教について」とか「道徳について」と異って福音的と思われる節々が伺える。理神論はもち論「新キリスト教」においても崩されていないと思えるが、カトリック教を異端と糺弾するに当り、その神学は

信者達に永遠の命を、すなわち、最も貧しい階級の精神的、物質的生活の出来るだけ迅速な改善を得させる為に、自ら提案すべきである地上の大目的を見失わせる手段を提供する^{註45}

ものであると非難するが、永遠の命を最も貧しい階級の精神的、物質的生活の可及的迅速な改善と換言していることは理神論的というべきであろう。しかし、対話の初めのキリスト教原理の問答において、革新主義者の言葉として、「全能の神がその宗教を数個の原理の上に建てられたと唱えるようなことは冒読というべきである」^{註46} と保守主義者を反ばくしているところで、全能の神 (le Tout-Puisant) と称していることに注目してみたい。神 (Dieu) を単なる創造の神 (le Createur) と呼ばず、全能の神と呼んでいることである。創造の神であれば、宇宙は創造されて以来自らの法則で自己発展を続けると解する理神論として一貫性がある。全能の神と呼ぶことは、宇宙創造後も神の支配力が及び、すべてが神の手の内にあると解釈は出来ないか？ そこには神の人格的接触を認める契機が包含されてはいないだろうか？

また、「イエス・キリストは最も熱心に最大多数階級の幸福の増進に力を尽す人々に対し、永遠の命を約束された」^{註47} と述べていることは、理神論的換言というより、むしろこゝでは、人類の幸福増進に尽力する人に対する約束であるから、これは福音的であると解せないか？ また、カトリック僧侶の在り方について次のように述べている。すなわち

すべての僧侶は自分の説教の中で、また、その親しい対話の中で、最下層階級の人々の生活改善が、かならず、上級階級の家現の物質的な福祉増進を引き出すということを、平信徒に対して証しするため、自分達のあらん限りの知的方法を、また、そのあらん限りの才能を、用いなければならない。というのは、すべての人を、富める人さえも、神は自分の子としてお認めになったからである。^{註48}

と。神が自分の子として認知したということは、客観的立場からの支配者的恩情の押しつけ

でなく、親子の情としての愛の結びつきであろう。子たる人間に神が「わたしの子」として接するのであるから、理性を超越したアガッペーの存在を認められよう。これから推してもサンシモンは多分にルターの影響を受けていたのではないかと思える。

次にサンシモンは、「現在の宣教師達は実際反キリストである。なぜなら、彼らは福音書の道徳とは全く反対の道徳を述べ伝えているからである」^{註49}と、カトリック僧侶が彼らの全能を維持するために行動していることを非難している。こゝで福音書 (l'Évangile) と述べていることに注目しよう。これまでの宗教論はもち論のこと、「新キリスト教」にあっても、彼は「キリスト」若しくは「キリスト教」というように記述している。にもかかわらず、カトリック教批判の最後に当って「福音書」という言葉を使用している。これはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書の福音的性格を十分理解しての言葉と受け取ることは穿ち過ぎだろうか。

また、「新キリスト教」の中での「プロテスタントについて」の終りの方で次のように述べている。

わたしはあからさまに、わたしがキリスト教の天啓について考えている所を述べてこの第一の対話を終る。

実に 1800 年の昔にその根本原理は生まれたもので、その時代以来、いかに偉大な天分ある人達の努力も、キリスト教の創立者によってその時に与えられた原理よりも、その一般性において、また、その正確さにおいて、決して、より優れた原理は発見出来なかったのである。^{註50}

と、神の天よりの啓示を認め、さらに語を継いで、

わたしは尋ねる。1800 年の昔、人類の調整者である原理を生んだ叡知が、すなわち、われわれが物理学や数学において重要な発達をとげた 15 世紀以前に、この原理を生んだ叡知が、超人間的な特性を明らかに持っていないと言えるであろうか？ また、キリスト教の天啓のより大きな証拠が、この他に存在するのかどうかを伺いたい。^{註51}

と述べている。キリスト教の天啓 (la révélation du christianism) と記述していることは、明らかに神が人間に対する愛ゆえに示されたものと理解しての言葉と思える。というのは、「キリスト教の天啓のより大きな証拠が、この他に存在するのかどうかを伺いたい」と、反論的に天啓の証拠を強調していることから見て、叡知が天啓であり、これは超人間的特性であり、人間の理性による理解を超えていることを告白したものではなからうか。

以上のようにみれば、サンシモンは自ら理神論者と認めていたが、内容的には相当福音的理解に近いことが伺える。しかし「新キリスト教」という彼の最後の小論文の中で、理神論者としての用語使用には配慮があったのではないだろうか。福音主義では最も重視する十字架上

の死による償いを表わすキリスト (Christ) という用語は 1 回しか使用していないが、イエス (Jesus) という用語は 7 回用いている。そして両者を併せたイエス・キリスト (Jesus-Christ) は 4 回用いている。これから見ても福音の理解を持ちながらも理神論を貫いていたように思える。

- 註 31. Taylor *ibid.* On Religion p.102
註 32. Taylor *ibid.* On Religion p.102
註 33. 出エジプト記第 20 章 3
註 34. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.146
註 35. Le Socialisme par Durkheim : Press Universitaires de France. p.210
註 36. N. Chri. Oeuvres vol. XXIII^e p.107
註 37. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 38. マタイによる福音書第 7 章 12
註 39. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 40. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 41. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 42. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 43. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 44. Taylor *ibid.* On Morality p.103
註 45. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.126
註 46. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.109
註 47. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.121, 122
註 48. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.122
註 49. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.132
註 50. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.186, 187
註 51. N. Chri. Oeuvres XXIII^e p.188

6. 結 語

サン・シモンはすべてに統一性を求めたように見受けられる。結集の中心となるものを求めた。個人性否定の科学性においては、諸科学の宇宙の本源的な一法則の系にすぎないことを示して、事物の統一性の発見に努力し、その法則が万有引力の法則であり、また発見しようとするのが哲学であった。

産業主義における多様性は、最有能者の管理のもとに、国境を超えたインターナショナルな世界に統一されるものと考えた。そして世界の多様性は、すべて、唯一の神信仰に紋られ、人間社会の成員は一体をなすものであることを望んだ。

彼は信仰と科学性を、個人性と没個人性を、精神的と物質的を、靈的権力と地上権力を、それぞれ弁証法的に止揚して、ジンテーゼとしての靈的権力優位の新世界を思考した。理神論に根ざした靈的権力ではあるが、今日の福音的信仰理解に近似したものを多く示しているものであったと言えよう。